甲斐叢記 前輯 五

和書門
類
二九三三三
號
一一九
函
一三
架
五
冊

内閣文庫
和書
類
二九三三三
號
五
冊
一一九
函
一三
架

内閣文庫

番號	和 29333	
冊數	5 (5)	
函號	267	77

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
昌平坂學問所圖書

甲斐叢記卷之五

目録

鎌倉海道
金川
鷺堂學校址
一宮
神座山
河口湖 并圖
吉田淺間祠
冨士山 小御嶽詣圖 北口之圖
萩原口
山梨祠 并圖
國衙
圓通窟
國分寺址
御坂嶺
船津関址
山中湖 并圖
四阿山
二宮
國建明神
黒駒 并圖
河口淺間社
應和陣
加古坂
兜山

内一〇八七

突出礒并圖
菅田祠
玉室祠
大菩薩嶺黒川山
雁坂口
七日子祠
惠林寺并圖
千代櫻
藤木放光寺
一之釜并圖
○兄川
西保川
乾徳山
石森并圖
塩山并圖
面川
熊野權現
向嶽寺
裂石山并圖
機山八公
松尾祠
詠歌圖
機山
假山
心字の池
龍山庵
二之釜并圖
弟川
浄居寺城址
武田信實宅地址
廟
筑室
七屋敷
笛吹川
八幡祠
徳和川

道路之三

鎌倉海道

山梨八代都留三郡に亘ふ今の黒駒路(又御坂路とも)を云へ〻中世鎌倉へ往還の道ふ〻甲州道中の官道を置さ〻以往ハ關東ゟ諸州へ乃往来は悉て此路に係そ〻延喜式曰甲斐國駅馬水市河口加吉各五匹とあ〻按るに水市ハ今の市藏村其名の遺有るふらん此村ハ金川を隔てゝ下黒駒の北ゟ河口まて五里余り西の方國衙へ一里許そ東南の方御坂へ出て是古時の官道ハ塩田村へ黒駒一の關の口錢を取たるゟ武田氏の文書にえ〻そ古時ハ觀察使ハ駿州車返駅ゟ國衙に〻そ豆州三島ゟ出

峡西　大森欽　纂輯
秋山復　校訂

内一〇八七五號

又相州足柄嶺にを懸てき日本武尊も此路を通て給ひ〳〵古事記曰悉言尚荒夫流蝦夷等亦平和山河荒神等而還上幸時到足柄之坂下中略即自其國越出甲斐坐酒折宮云〻源平盛衰記に石橋の軍敗きて土屋三郎宗遠御使と〻て足柄通て甲斐へ越えかの源氏の輩ふ告るとなのそその他東鑑ふも此路を本州へ越したるらめさて其路次ハ府より酒折の前ふ出て和戸、川田、の二村を経て石和川の渡を超え八代郡の石和駅ふ至るふ右へ岐る〻路あて巽位に向ひ金川を渡て平井、成田、國衙二宮かゞ此村中川井上金川原下黒駒、支村の駒木戸と云の路右ふ行て此間路の左てハ北ふ當て塩田国分見座山神巽位ふ右の方乃ふ處ふ関の諸村を歴て等の村行り藤木宿ふ至て御坂嶺を踰え都留郡河口の湖に出て舟津吉田上下の二村行り下吉田ふの二村を過ぎ富士山の北麓ふて谷村より来る路ふ會ふ

て浅間の社前を南へ山中村国界の關なり府より十三里ふ至る此より加古坂を越え駿東の須走竹下を歴て足柄嶺ふ達て古昔官使の往還せらるゝ路なり

金川　黒駒奥八丁山あふ金窪と云地より發源〻鎌倉海道の少許左てを西北ふ流て平井村よりハ鵜飼川と称つて上平井村記ふ此川古時ハ菊島石和の古蹟よりて南を二瀬に分派て流るゝが何の頃ふか川瀬轉て今ハ村の北を流るゝ云按ふ金窪といふを古昔金礦を産せ〻地なるゆゑふ金川の名も是より起て金川原と云村名も又此川ふ因て起てものと覺ゆるが天正文祿中の文書に狩野原宿と作るを後ふ訛轉て〻もけう尚後の考を俟つ又按に宿と称の當時駅のるれ係て

國衙　郷名ハ記セス

美和明神二宮　社領百七十七石餘大巳貴命を祀る又杵衝神社とも称シ本州の二宮ハ社記曰　景行天皇ハ御代日本武尊の命にて塩見足尼勧請セしハ　雄畧天皇十二年九月九日國幣を給ふ時　應神天皇の皇子二派の皇子の御子太郎王（或ハ曰鷺王）の子坂中井君國衙に御座る時國奏に依て坂中井の君に始て神務を司らしむるを社祝の大祖とふ又曰　後宇多天皇弘安中蒙古襲来之時有勅願異賊敗没之後正一位勲一等を賜る勅額今神殿に掲ぐ長五尺幅三尺題曰正一位美和大明神　後小松天皇御宇應永中國主弼を賜ふ宸翰の額今現ハ寶庫に藏む長三尺幅六寸題曰國主正一位薫壹美和大明神とたり又尾山村に山宮と云祠たり傳ハ

云ハ　景行天皇の御代の比當社ハ其處ハ座ましを　雄略天皇の御代ハ今の地ハ遷し奉りしとふ祭祀ハ年中ハ七十五度そのうち中ハ四月中の亥日ハ一の宮三の宮と同じく龍王村へ神幸たり　所謂東御幸にて其式國王祠の条に記せし如し三月始申日尾山村ある山宮へ神幸あり十一月中の亥日ハ此日も一の宮三の宮と同じく上石田村まて神幸たり其他神寶古文書等委しくハ村条に記す

鷺堂學校址　中川村の北東原村　林部社記曰林部神祖の祠の邊に聖堂たり振鷺堂と称ひしハ何の頃にか廃壊ぶて今鷺堂といへる地の名ハ遺りて云此地ハ寺たりて青鷺山小王寺と称シ（臨濟宗寺領五石余慶長の郷村帳に是を鷺堂領と記たり）此寺を今も里人ハ鷺堂と呼へり按ハ此處ハ國衙へも近き處ありて學校の在りしと云

も謂ハ也無にたらず　天智天皇の紀ハも諸國建學校とたゞ古今ハ典籍を集め學校田勸學田を寄らも志たるものをして學問をあきしむられを學生とつゝ上國ハも四十人博士たるとこれを教授しあるも白河帝の御時諸國ハ孔廟頽破しらば藤原敦光此由を奏状あゞて修覆を給ふん事を請しうど勅許もたらで止ふきとのや然もて本州ハ國衙の条にも記をし如く貞治嘉慶の時國別當留守所目代等の文書も傳らり又當時除目のるもたゞも歴史に見えるれハ應仁大亂の後にこそ國衙の政令行ぬぞあるしあら名國衙の廃ぞたらん程を學校も絶ずたるまたるもを

圓通窟　井上村　又姥塚とも称て南照院と云る洞家の寺内にたり窟の口方九尺許深さ十二間奥に観音の木像を安置す塚の上ハ七稜たる石浮圖一基あり一面毎ハ梵字并に佛名を書しを下に銘文たり應永辰壬佛降誕日省忠立之とあり是も古の石室にして中にも最大なるものあり或ハ姥塚ハ御馬塚の訛にて甲斐ぬ黒駒を葬ぞし塚ならんといへども證なきそ

そこれと決かしし

一宮庄塩田郷井上郷　庄名郷名に記せり

國建明神　塩田村　國造鹽海足尼を祀るし社記ハ社中ハ大なる古木の朽たるゞ絶ハ存とり里人相傳て此國開闢の時の水ありと云て其傍ハ國建石と云るたり或ハ矢石とも呼て古昔天より降しし矢の石と化たるありと云傳へ

浅間明神　一宮村　社領二百三十四石余祭神ハ木花開耶姫命にて瓊二杵尊大山祇神を配祀る本州ぬ一の宮あり社記ハ

垂仁天皇八年己亥始て神山に祭らる（今此処を山宮と称ス本社の東二十町許の地也）清和天皇貞観七年十二月九日今の地ふ遷し奉る
といへり按ふ三代実録ふ貞観七年十二月九日勅甲斐國八
代郡立浅間明神祠（河口村の条ふ詳ふり侃せり）
べあるを混ぜて誤るならん又同書ふ同月廿日於山梨郡致
祭浅間明神一同八代郡とあるハ即ち此一の宮なて古昔ハ此
邊ハ山梨に隷き河口ハ八代に属しあり斯そバ富士山の暴
火ふ就て河口ず社を立て又此社をも祭らもし時今ハ地へ
遷せ〳〵あらんゑ本社ハ櫻をもて神水とせを機山公社参ハ
時詠せし歌なり
移〳〵植る泊瀬ハ花の志ら玉を抜て手を行る神のまに〳〵
祭禮ハ年中七十五度とゞ中ふ四月中ハ亥の日東御幸なり
其式二の宮三の宮に同し十一月上の亥乃日に上石田村へ神幸
なり此二を夏御幸冬御幸と称ふ國中の大祭ふり其通を筋
ハ古より此道を更ぶ是を三社神幸路と云を又三月上の午
此日山宮へ神幸なり三日前の黄昏に神官道を清むるとて
小麻殺にて製れを長さ六寸許上頭に一寸許の紙を挿む を通を筋へ撒せを是を吉旦
舞祭と云ふ里人畏き敬ひて門戸を出す若こをふ遇で地上
に平伏とゆへを
國分寺址（金川原の北 国分寺村）聖武天皇勅願所金光明四天王護國寺
と號ふ行基僧正此開山せし〳〵り聖武紀曰天平十九年十一
月己卯詔天下諸國國別令造金光明寺法華寺其金光明寺各
造七重塔一區並寫金光明経一部安置塔裏云〻塩山抜隊語
録に國分寺住持秀山傑長老贈荅偈〻〻〻〻〻〻按に抜隊禪師

思駒里
雲煙出所

寒寞黃金
臺無人求
駿來背箱
秋郊色殘
花空自開
友野璣
翠屏書

本州ふ来ま〳〵ハ永和四年ふて至徳四年ふ寂せり其後何の頃ふ壊廢ふそん詳ふを知ら〳〵天文中機山公の時名所の寺の蹟ふゆゑとして一の小刹を建て寺領を寄附られ快岳周悦を以て住持とし勝頼朝臣の印書もありて此寺の域に古昔の殿閣伽藍の址ふとして礎石存ま古き尾の缺たる多く出づるあ羅の紋ありて厚き五六分許ふて稀〳〵にも全形も存ま

今の国分寺ハ鎌倉宗にて護国山と号す寺領七石余ありて其境内ハ古の護摩堂の跡也と云

和秀山傑長老雪中来訪偈

深雪侵来誠忘幽。説玄談妙不勝勇。爭如　抜隊禪師

西口無二舌。學海波瀾須直休

かさつをを尾ひろへとをとそ　嵐外

黒駒

牧名に記をり今ら路を黒駒路とも呼ふハ此村ふ係ま路ふゆゑふその大體をさ〳〵と云へ共ふ細川玄旨東國陣道記ふ七月十六日甲斐の國河口と云所ふ泊まて暁ふかく御坂をおえて甲府につくその道ふ黒駒と云所ありて

神座山權現　社領廿六石余檜峰神社と称ふ少彦名命素盞烏尊大巳貴命を配祀る社記ふ　朱雀天皇ゆ御代ふ平将門ゑ叛き〳〵時奉幣ありて其節の願書等今に存まと云又本祠の巽位ふる山の上に高皇産靈尊を祀まと嵯峨ふ岳と称ふふをを今俗ハ訛まて釈迦ゑ岳と呼ま四月八日参詣ものいと多し

神多ゑ卯月ゆ初ふ多ゑ花ゑ桜ゑ　河内公明

御阪嶺　嶺上を八代と都留との郡界とす古傳に　景行天皇

の御代日本武尊足柄より是坂路を超え給ひて甲斐國ふ
入給ふ四名に御坂と称ずと云へり此山甚嶮峨〻く坂路屈
曲して絶巔に至る山の上に北條勢の陣き〻墨壁の址各所
存せり編年集成ふ天正十年八月十二日北条左衛門佐氏忠
雑兵三千にて味坂城より黒駒へ押出す鳥居元忠等千五百
餘の逞兵急に攻蒐ゆれば大に敗走し岩石ふ當て死する者
二千六百七十餘人氏忠一騎にて漸く味坂の城ふ引入ると云
嶺の上より見渡せば河口の湖眼下ふ湛へ富士の山その南
ふ聳りて此を距る事一里余り然しも曠き麓野の彼方ふ拔
出て大虚ふ立ばうり其影湖水の面ふ浮びて白雪青蓮ふ
涵をり實や眼ふ一点の遮るもなく形〻此山の全き形をるる
事此に及ふ處をも〻ふうふべし往昔より御坂の富士とも〻

世ふ称譽し来つれども宜なり

法師ふ成ぬ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　能因法師

時しらぬ雲ふ光ぬ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　教定朝臣

秋ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　基氏

富士の高ねにえて今の〻る山々の禁ふ〻め　加茂季鷹

ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　青島定賢

故郷ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ

近〻て〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ

ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　幾秋

動〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　蓮山

池大雅富士圖　釈大典　竺常

池生數遊富士。攬勝四面。此其甲之御阪河口。所嘗覩云

雨色連林壑。秋光半淡濃。霽空忽回首。削出芙蓉
冨士淺間明神河口村　水花開耶姫命を祀る三代實録曰貞觀六
年七月十七日。甲斐國言。駿河國冨士山忽有暴火。燒碎崗巒。草
木焦熱。土鑠石流。埋八代郡本栖并剗西水海。水熱如湯。魚鼈皆
死。百姓居宅與海共埋。或有宅無人。其數難記。西海以東。亦有海
水。名曰河口海。火焰赴向河口海。本栖剗等海。未燒埋之前地大
震動。雷電暴雨。雲霧晦暝。山野難辨。然後有此災異焉。七年十二
月九日。丙辰。勅甲斐國八代郡。立淺間明神祠。列於官社。即置祝
祢宜。隨時致祭。先是。彼國司言。往年八代郡暴風大雨。雷震地。雲
霧杳冥。難辨山野。駿河國冨士大山。西峰忽有熾火。燒碎岩石。今
年八代郡擬大領無位伴直真貞為祝。同郡人伴秋吉為祢宜。郡
家以南。作建神宮。且令鎮云云郡家ハ郡司の官廨なり此處古時ハ八代郡
に属き後世ふ至りて都留郡ふ隷しるハ他ふも云る如し地
理を以て考るに郡家以南作建神宮とのたまは一の宮ハ今の郡
ふて北ふ当り此處ハ郡の南ありはら前年の爆火ふ冨士
山の麓野の諸村ハ爍砂に埋まれつゝ此處ふ川口湖の北
崖たれを湖水隔絶て爆火の及ざるゆゑふ祠をも建しも
のなるべし尚若疫路鳴沢大田川の条を俗ふ見べ
河口湖　周回凡そ四里余東西北ふ山を環らし南に冨士山峙
立て然て南乃崖ハ舟津木立勝山坤位ふ大嵐等の諸村なり
て麓野ふ接き西の崖ハ長濱乾位ふ大石北ふ川口東ふ巽
位ふ回て淺川等川口の乃諸村陸續より又鸕鷀島湖中ふ乳
ゲ崎木立村の界ふて湖上ふ出たる盤石なり肥ゲ崎河口
と大石の産屋ゲ崎川口の南茂川子轉ゲ崎産屋ゲ崎の北ふ属て南ふ当り等名
問ふ

御阪嶺
河口湖
兩景

々たる景勝ども〻と多しこの高嶺のうつる水上ふ扁舟を泛めて舟津村に至る其間の景色華みも記〻〻画も寫し難かるべし

吾河口の里を過ぬれば

高橋石足

住なれし世里人のなつかしく何もろ〻の名の白雲

清水濱臣

新うの住屋を根こそぎ流る小川口の湖

産屋か濟

飯田正房

みどりなる松の葉の陰に松ぐれの舟はたゝ揺浪あり〻

芭蕉

雲霧の新時百余津〻〻

漫〻

湖水日和を時の揺〻の船

釋大典

題池大雅富士圖

池生数遊。極其勝槩。此乃甲之河口湖。所嘗覩云

寒空飛雪曉紛〻。稍霽時看峰獸分。秋毫能開天半色。始知千里一勞君

題池大雅河口湖圖

釈萬庵原資

層巒八葉鎖丹霞。鸞馭飛回岳頂賒。萬古青天懸片雪。雲中倒映玉蓮花

湖面春融雨後風。雲開万頃鏡光鎔。岳影映波無剩碧。驚看忽有両芙蓉

吉江昂齋精

船津關址村船津　東十町許〻〻道の傍に地藏堂あり〻この地を地藏轉と名〻上吉田、松山、舟津、三村の分界なり此處を古へ八代郡と都留郡との疆界あれば駿相の敵乃為に関を居て守防らせしものとゝえ道の左右なる皆石畳なり又此より松山の月光寺の後まで外形は石垣〻〻所今は遺る

を小佐野氏（吉田の祝）ぞ藏る弘治三年丁巳十一月十九日機山公の淺間明神へ社願書ゝ役未歳戊午夏六月長可拔船津関鎖と云

應和陣　関より南一町許の際を云此地古墳いと多し関の傍まて〻〻接て各所にらゐ土人の傳ゝ古昔合戰ありし戰死の多かりしかば其骸を此處ゝ埋めて墳塚を築しなりと

いへ按に應和は　村上天皇の年号なり當時いかなる争闘ありしを存をしまう

淺間祠（上吉田村）　諏方森と云処なりなを祭神木花開耶姫命ゝ社域ゝ子祠若干ありて次第ゝ建ち並ぶを大華表高五丈八尺両柱の間三丈六尺なを額竪七尺五寸幅四尺七寸五分文字三國第一山とあり（曼珠院宮無障金剛入道二品親王良恕書寛文十三年丙子二月十七日秋元但馬守）

寄進ゝ別ゝ古き額もあれども筆者詳ならず　勝山記ゝ文明十二年庚子三月廿日冨士山大鳥居立とあるを此華表を冨士の綽楔ゝて專ら此祠の為ゝ建しふを知らざるべし委しく村条ゝ記をる田園雜記ゝ吉田ゝいへゝ所ゝ至るまでのみちにてはべをれで今夜ゝ二月十五日月いと明かなりしかばのまさだうあらけりそもバ

きよらなる月の影ふる冨士ゝ高ゝ見れば　聖護院准后

吉田まで山をくだりて日の本は倭の国の塔とぞ山を　加茂季鷹

山中湖　冨士八湖の一なり或ゝ臥牛湖ゝいへ形の似ゝふを以て名ゝ呼ぶ　昔ゝ早歳ゝ駿牛を驅ひ入て雩をれば忽ち驗

けりと云

加賀岩上鶴山中眺圖

菊溪

清水濱臣

孤客歸來天衢
熟山中不復怯
衣草遠峰雲起
知杖底敗葉纏
頭沒毫雲

松亭柏祖

カロ古坂　東鑑に承久三年辛巳七月十二日按察使光親去日出家法名西親者為武田五郎信光之預下向而鎌倉使相逢于駿河國車返邉依觸可誅之由於加古坂梟之訖時年四十六とあり光親卿の墓とて此阪の東の方に五輪塔存す名勝志に延喜式に載る加吉ハ此処なるをキコ同韻なるを後世轉訛て加古阪といへる也　欽按に此説もさる事なれど古と吉とハ字の形至て近けれバ字は誤寫より如斯る違の出來しなるべし非ざるか土人もカゴザカと呼なりよりて考ふれば國史に吉とあるが却て誤寫ならんも知べからず其を方言にて中々に古言の遺る事も有ハあり猶委くハ村系に辨をべし

みし嶺のそこと仰ぐをみれバ我身も雲にいれバなるらん　清水濱臣

甲斐の山中まで

山賤のおとがひ閉るむぐらかな　芭蕉

かど若の柿の若さく深山かな　素堂

宿かせと刀投出す吹雪かな　蕪村

落きらぬ影の白さき木の葉哉　蒼虬

籠阪望岳　高橋澹然

天邉仰見白芙蓉。去國雲遊身似龍。今日飛昇山半腹。自欣咫尺接清容。

冨士山ハ此山古より記せる書も數多にて世の人偏く知られし所なれバ瑣屑しく記をに及ばず唯本州に係る所の梗槩を擧れバ尓此山を古より駿河の冨士と稱なして万葉集山邉赤人の歌に天地之分時從神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者と詠じ其他國史及ハ都良香冨士山記にも

皆駿河國と記せるは山は表の向たる方にて言なほ遠し地理ふ據て論ずるは山は東南籠坂甲駿の界より西北裂石上まで裾野十三里は間ハ皆本州の地なり故ふ天正五年勝頼朝臣祈願書ふ日本有山名富士界雖跨三州過半吾甲陽之山也と云ひ又峽中紀行ふ載籍以来以山隷駿州者蓋取諸海東瞻仰之有在也其實則山之在本州者六之三駿為二豆為一古人鹵莽之甚可以痛恨など云るは本州は抑鬱を霽す愉快き説云いへべし然ど又三國ふ跨と云るは古より誇大て称るを誤傳たるなり其は上まで謂し如く東南籠坂より西北裂石まで山の麓を甲駿は二國ふて環抱し伊豆の域へハ係さるにて知るべし且万葉集高橋蟲麻呂詠不盡山歌ふ奈麻余美乃甲斐乃國打縁流駿河能國與已知其智乃國之三中役出立有不尽之高嶺者と云る是甲駿二國ふのミ跨る證なり又夫水集光俊朝臣は歌ふ「ふじの高ねのひもすがら雲は中に出て四方にそなる山ハなしの根又讃人不知」ふ山ひとつなるものとのみ思ひしに かひもなきもあるものなるもあるものなど花ゆ然を何の頃よりか言初るか三國ふ堺まして玉葉集隆辨大僧正は歌ふ「めふうけて幾日ふ経ぬ東路や三國を堺ふ富士は芝山」元政上人の詩ふ根跨三州烟樹老嶺分八葉雪花重ふど此外枚舉に遑ならに今更言解がるうほべし此山南口須走口村山口大宮口三道何を表とし北口吉田口を裏とせるとも古へより多く北口より登るを此北口も日本武尊東夷征伐より帰る後ひしとき本州へ係る此處して富士を遥拝し給ふ所ありと云傳ふ浅間社の後ふ大塚ハ即ち其所なりとて小

冨士山
北口

萬壑千峯劒戟攢
爭高競秀幾層頭
就中冨士獨渾厚
便是東方第一山

朝川善庵

吟川麓書

祠を建つ此地即ち上吉田村にて祝の家〻櫛比て繁庶を登
山の人此小至りて潔齊め山行の裝を飾り此処より鈴原駒又
返と云ふまで三里は間裾野なり鈴原は近き邊を駒馬場と云古
時淺間の祭に流鏑馬行るゝ処なりしが後吉田へ移すと云
天正十七年小山田信有の印書に駒馬場之上に鳴物從古
法度之事云々此邊の相心得者也と有るは是古い此より
嶺まで鳴物を禁ぜ〻と云ふ此邊より道漸く急にて鈴原小
至りて山路小入る此処より測量もれば地の高き御坂の嶺
と齊と云ふ是より峰頂小至るまで里數を称ずして合勺を
以て數へ十合小極る神社考小　孝安天皇九十二年六月富
士山湧出初雲霞飛来如穀聚云〻是は由て又穀聚山とも称
ふ山の形平地小穀を盛たる如し故小外もて穀を量に擬へ

大凡一里を一合に量て山路を計と云是例乃無誓説あるべ
し　欽按小此山も役行者の開〻にて佛乃道をば離れ得ず一
合五勺目に定禪院と云る廢寺の址さんありて山中にい今
も佛像の多く祀ふ行るをば中古を悉く佛家の有にてなり
故頂上ある空坎を兜率乃内院に比べ其周囲の八乃峰を八
葉の蓮花に譬へて各佛名を配當せ〻ふるを此山に登る
艱苦を人間世の生死轉變に喩て大小の刼數をもて數へ刼
い佛家にて一世を云大刼小刼の別なり　十刼に至れば乃ち
又倶舍論小時之極長者為刼となり
兜率天に生を受〻と云る意あるべ〻刼の間の小數ハ須臾
と呼〻にもやらん　僧祇律に廿彈指為一羅預廿羅預為一
須臾一日一夜有三十須臾といへり
然を後世音通にて刼を合に誤〻て須臾をも勺と訛ふ呼
て合勺をもて唱〻故斯る浮説は起るふらん偖一合〻

絶頂までは勝地古跡を合数は下に標記す佛龕神祠及ハ石室等は数多の支故悉く挙るも煩きるあるべ縁由なきもの

大率省きつ

一合目　定禅院廢址　昔ハ吉田西念寺塔頭清光院の住持毎年六七月の間参詣して常念佛執行せ〻云

二合目　小室淺間祠　貞観七年十二月九日に祀る所にて此山に勧請の始ありと云　御釜　廣さ数十丈ある一片の石ふて石の面に穴ありて徑て二尺許深さ七八尺もあり　役行者堂　是より上ふ女人の参詣を許さず

四合目　御座石　高さ三四丈廣さ六七間の巨岩あり頂ハ淺間明神と日本武尊を祀る永禄七年小山田信有の文書に中宮之御座石とあるハ是なり

五合目　小御嶽祠　岩長姫命に日本武尊を配祀る詣ずる人い〻多く天狗の假面及ひ風鈴斧等の寂重きものを納めあり西の方ふ天狗の庭と呼ひ樹木皆偃卧て種々の形を成し人手にて作るごとし

後昆流布の地ハ因て名に其處ふ経嶽　不浄嶽　古ハ六七月の間山伏此處ふ籠り居て登山の人の不浄鮮除の祓せし故云

六合目　鐮岩　大原旧記ふ永正八年八月富士山鐮岩燃るとあり今も此岩の中に時〻烟立ことあり

七合目　駒嶽　小屋の中聖徳太子の像と銅の馬とを安置す太子傳暦ふ推古帝六年夏四月甲斐国貢二駿駒四脚白者秋九月駒此馬浮雲東ふ三日之後帰来謂左右曰吾騎此馬踏雲凌霧直到富士岳上轉到信濃経三越竟今得帰と云て此ふ因て駒岳と名づけしなるべし

八合目　駿州須走口より登る者此呼て曾ふ故ふ大行合の名あり

九合目　火御子　圍く大きなる石にて色白く滑沢なり物影ハ映ること鏡の如し裂て五段となり此を来迎といふ神社考ふ貞観五年秋白陀三尊の影此石ふ映る時弥旭日の地上を離れんとする時衣神女出現双立舞遊時火炎揚有圓光即祭之号火御子とあるハ是なるべし

絶頂　獅子岩　坎の南岸ふ手出たる大岩乃形獅子の蹲るに似たるなり都良香の記ふ頂上池中有大石石休驚奇宛如蹲帝と云るは是なるべし

薬師嶽　東齋河原　勢至嶽　銚子窪　銀明水　駒岳　七合目同

〻地名なり此處ハ聖徳太子の像と銅の馬なり

鈴峰　釋迦嶽　峯の内ふる内院の方を内濱と云峯の外を外濱と云

表大日堂　此處駿州大宮道なり　鯖池　常ふハ水ふて其声雷の如し中腹に下ること廣さ数十町谷底深さ量るへからず中腹を攀る者此處を喻るふ難き故裾野ふ下て漸に向ひの岸ふ移る此間一日路なり　大澤　岳の西北方数千丈の谷なりて砂礫常ふ飛ひ流れて裂石　金明水　西齋河原　阿弥陀窪　観音嶽

抑此山出現せ〻古より此傳ハ皆荒唐なる談なりて信ひ難か

小御嶽詣

国立公文書館
National Archives of Japan

〻〻に近頃吉備の昌谷精溪が撰けふ登嶽記に其事を辨晰て頗其論の正〻々〻ば後人迷惑を解くべからんと其説を抄出て爰小録〻ぬ

相傳江州之壤。一夜圻為大湖。駿乃湧出斯嶽。是齊野之語爾。天子聖明。人民皞〻。皇天后土。有何不滿而為是殃孽哉。或謂太古之世。雲霧蔽翳。人未見其全狀。是或古之遺言。蓋方天造之草昧。人民淳朴。鮮所毀譽推尊。則雖薪爲樵爲朝夕爲。未嘗知其美。猶遺陰雲重結也。文教之所光被。民風日變。来往上國。稱揚此之神秀者。稍〻有之。比及倭武王東征。一望此山。稱為第一名山。而後猶之披層雲望白日。始大著于人間。是以有傳此説歟。故曰。是或古之遺言。自此爾後。都人下國。傳相欣稱。雖海外異域人。亦罔弗云。日本有靈岳玉芙蓉者焉。千載一日。以至於今矣。

富士晴嵐 享保中勅許八景 入江民部権少輔相尚卿

吹おろす嵐をえてむらぎえの白雲

名所山 懐紙 一蓮寺所藏 吉里朝臣

ちはやぶるいつの世よりか積もりて色もかはらぬ山の根

美人微笑立雲端。向背誰言都一般。欲識 徂徠

士峯真面目。却從甲斐國中看

請聽甲人論富岳。全身在北面東臨。天下 雪翁

浪傳駿風語。未必山靈為服心

萩原口

青梅通ヲ又大菩薩越と云ヒ山梨郡ハ係る雁坂口も此路ハ係りて神内川村ハ分レ府より酒折ハ前ハ出て其支村ある山崎と云処ヨ岐ちヲ左ハ分岐て横根、櫻井、鎮目、別田、雁坂口開道の岐路ちヲ万力等の諸村を歴て笛吹川を渡ヲ出の磯ちヲ北ハ差神内川村ハ抵ヲ森岡ちヲ東ハ石後屋敷、井尻等の數村を徑て塩山ハ麓ハ出て千野、竹森ハ二村より萩原村ハ係ヲ面河を渡ヲ小田原村ハ至る関ちり府六里余是ヨリ大菩薩嶺を超え都留郡多波山、小菅二村ハ方へ下る岐路ちヲ右ハ小菅左ハ丹波山多波川ハ沿ひ武州多摩郡川野村ハ小菅の路此処ハ河内、氷川等ハ諸村を歴て青梅宿ハ達るハ會ハ

由山崎而左。循田中小逕。雨益甚。疑在雲氣中行也 峡中紀行

雙條羅帶現空中。淡碧着烟未背濃。大叫 徂徠

一聲雲罅合。猶將狂思覓長風

要齋辱顔伴客身。錯尋夜半負山人。君家 雪翁

頼是有毛頴。莫道腕頭重万鈞

不道万鈞無腕力。携来恁奈両辱顔。黛眉 仝

却恐更相妬。囊有釜無灘上山

自横根到鎮目

復嶺層巒遠近間。烟雲幾朶綰螺鬟。今朝 友野霞舟

却覺風光別。即是平生見慣山

偶廢看書課。聊為出郭遊。尋詩過野寺。沽

酒到村樓。石壓松横卧。谿田水逆流 平等川自

松本村左折為逆河行邉饒画景。箇箇不勝收

別田到萬力

山梨岡
使客忽忙未
有由出宮却
恨負風流山
梨岡上山梨
樹每值花時
尚發不
徂徠題
天埜離書

村ニ著處説豊年。種稑青ニ間ニ水綿。織是　仝

三農民力遍。梯田耕到碧山巔

櫻井里　里名小記せり

山梨祠鎮目村　社領八石余社記小山梨岡神社あり大山祇神別

雷神高龍神三座を合せ祀るゝ毎年三月始の午日午時御

室山域内へ神幸ありて七日平等川へ神幸ありて是を七夕祭

といふ又正月十四日の夜筒粥祭ありて年の豊歉を占ふ宮殿ハ飛彈工匠の造立ゝ扉前小水を以

て彫ゝ刻ゝ獨足の獣ゝ像を置ゝ是を夔神と称し庭上に

郡石と名づけたる石ありて長五尺三寸横四尺二寸傍邊ハ皺

免ゝ紋ありて峡中紀行曰。左過鎮目寺前。益左詣岡下。有祠。即祀

典所載山梨岡社者也。殿甚古。柱皆成蠹蛀痕。殿扉雕鏤頗纖巧。

祠祝云。是武田番匠者造。蓋曩時工人食稟者。如它州称飛彈匠

也。前有木刻獨足獣一。祠祝不識為何獣。問祠奉何神。即大山祇

命也。傳云山之怪。夔魍魎。豈是耶。華表北一石。大可五六尺。謂是

郡之鎮石。歳時有事祠中。輙所徒神輿。莫幣牲處。就視傍作雛紋。

如綿絮狀。厚纔數寸。不能識其入地深幾百千尺也云々

あかつびく山梨八岳の神恒神　萩原元克

山梨岡上舊聚祠。剥落丹青霜露隨。莫笑　雪翁

老巫不知字。曾聞百足見憐夔。

聞道　崇神世。奉祠今尚留。石標分二郡。　友野霞舟

祠前有一石傳云古以此為郡縣分界名曰郡石　廟宇邈千秋。肅

拝驚奇覯。靈蹤實寡儔祠壇尚是當時物國中舊社是為第

一泉流清如玉。一掬洗羈愁。

四阿山權現　或ハ吾嬬屋と作り北山の半腹に在て日本武尊橘姫命二神を崇祀ると延喜式に載る甲斐奈の神社是歟

社領一石余

つゞまやのあまりに雲霧晴れいづる神峯月〳〵晴れいづる　西行法師

魚貫凌懸磴螺旋連絶巔紅知初染樹黄　仝

認未収田岳色晴擎雪川光暝帯烟山上視石　友野霞舟

和笛吹諸水芙蓉戴雪卓出於群山上　詠歸應踏月薄暮尚留連

兜山岩下村　四阿山乃西北に擾て巨岩突出て其形冑の鐵盛に似たるを又山足陵夷ある處頭鍪簾乃如〳〵因て兜鍪山と名づけ〳〵ん

兜山在左方嶺上雲霧封不得覩其真形

悉道兜鍪掛指端空濛一氣裹群巒想應　徂徠

神物雲烟護不許詩人冷眼看

前山咫尺壓轎頭渾被雲烟鎖暮秋却訝　雪翁

土人眼睛好朦朧指點似兜鍪

突出磯八幡南村　塔山の崗埼みて笛吹の河瀬小枕て突出たる處をいふ此邊を波埼といふ地名もなり岩石奇絶く畳まりたる際ふ松樹欝葱として神内川の渡口ゑ接き東に塩の山なり北ゑ恵林寺なり栗原筋の諸山遥ゑ圍繞して其景状蒼海ゑ臨める想ひ古時より塩の山差出の磯あど打續て國歌にも多く詠ぜし地なり

塩の山さしでの磯の磯なれや海人の子ども出て遊ぶ　作者不知

塩の山さしでの磯の磯の松の月八千代をかけて澄　前大納言雅言卿

突出磯
野草花閑路欲
迷嶢〻嵓一座挿
清溪〻聲舜寞
無人賞只有烟
中水鳥啼
友野霞舟
秋山復

竹逸寫

沖つ波さゝをの磯の濱まつ風吹ゆるまに〳〵

権中納言長方卿

小夜ふけて空さえわたる波の山さゝ岩の磯も浪やこすらん

忠房親王

ふきはらふ沙のさゝ岩の磯の松はゝ代の春ふるちよの色とゝ

権僧正公朝

八重霞とゝまるあけの山さゝ岩の磯小波もたゝぬて

隆信朝臣

波の山さゝ岩の磯の陸方小友またゞれまきこゆ水くき

左近中将経家卿

波さらぐ拾ふの磯の岩まゝ松かゝふのみ神ぬせとゝや

後徳大寺左大臣

手枕とまをゝるまくらし岩ぐまのさゝ岩の磯をたゝる波

前大納言資季卿

波のうへや桜さゝみ波さゝる花ふゝ松さゝ岩の磯の秋の月のげ

民部卿為家

風〳〵のさゝ岩の磯よ波月ハゝ代もかぎらず久さの空

従二位範定

波ゝくゝ松さゝ岩の磯の岩ゝ松移ゆ〳〵れてかゝるもあり

中宮大夫定房

夏ゝ山ゝ宮き雲ゝ波の月新ゝさゝ岩の磯ゝ波ゝ形ゝ

頓阿法師

突ゝの磯ゝて雪ゝあゝ新ゝきゝてゝある

去りゝげさゝそいぐゝう波の山たゝひとけゝや雪のあゝ

聖護院道興法親王

今文川ゝさゝ岩の磯ゝ雪ゝ乃ゝ波ゝ岩ゝ波ゝをゝあけゝり

加茂季鷹

ゝむ岩ゝ波ゝさゝ岩ゝでの磯ゝ雪ゝ新ゝのつゝの一形ゝ雪ゝ形ゝ

仝

波の山さゝ岩の磯の友ゝ雪ゝハゝ代ゝ代ゝ雪ゝ思ゝ雪

年徹

磯ゝ雪ゝひとつゝ〳〵ゝえゝ雪ゝ帰ゝ

蟹守

磯ゝ出ゝて白ゝ雪ゝさゝ岩ゝ波ゝ雪ゝ雪ゝのうゝげ

草九

到塩山問。指出磯何。候吏失笑云。此石和入府城。道中可望焉。予縁名近。而謂其在此也。

昨入國門何得知。塩山潮積路参差。総曰名跡拓人到。禹貢九江自古疑

徂徠

世上名高指出磯。臥遊時有夢魂飛。塩山　雪翁

近處苔相問。尚隔數峰回馬歸

石瀬潺々夕。還聞上下啼。飄風川上起。憐　釈大典

爾未安棲

人激成功水激鳴。激鳴田鑿石亀泓。懶翁　土屋新川 與

来浴幽閑意。只在春風鷗鷺盟

松根抱石浄無泥。欲墮危崗半枕溪。擬使　太野霞舟

後人知姓字。新詩手掃古苔題

断磯臨澗勢崢嶸。碧浪淙々碎玉聲。為是　愛知揖雪 敬

古人留詠地。至今孤石冒禽名 水中有石名千鳥石

石森邱祠 石森村　社領二石余國建明神及び熊野権現を祀る

此邱さゆく大きなるねど巨石巖を畳みて平うなる野中ふ

抜出たる四方の峯を遥ふ隅たるど更ふ深山幽谷の趣ひを

此域内より小さき水晶を産も

岩ごねの森の涯を瀧いさきよきこふるべの小ゆるゆ　作者不知

神垣や新のあまの例しとて幾代すでも朽ぬ石ふる　仝

天津日の光も添ぬそむ〻ぬ神の玉ぞ久しき　仝

何畏の山ふ為ぐてあ引の山ふとこ世石森の玄　加茂秀鷹

宮柱おさんごねと神の世よ条めのおき〻見の岩もり　青嶋定賢

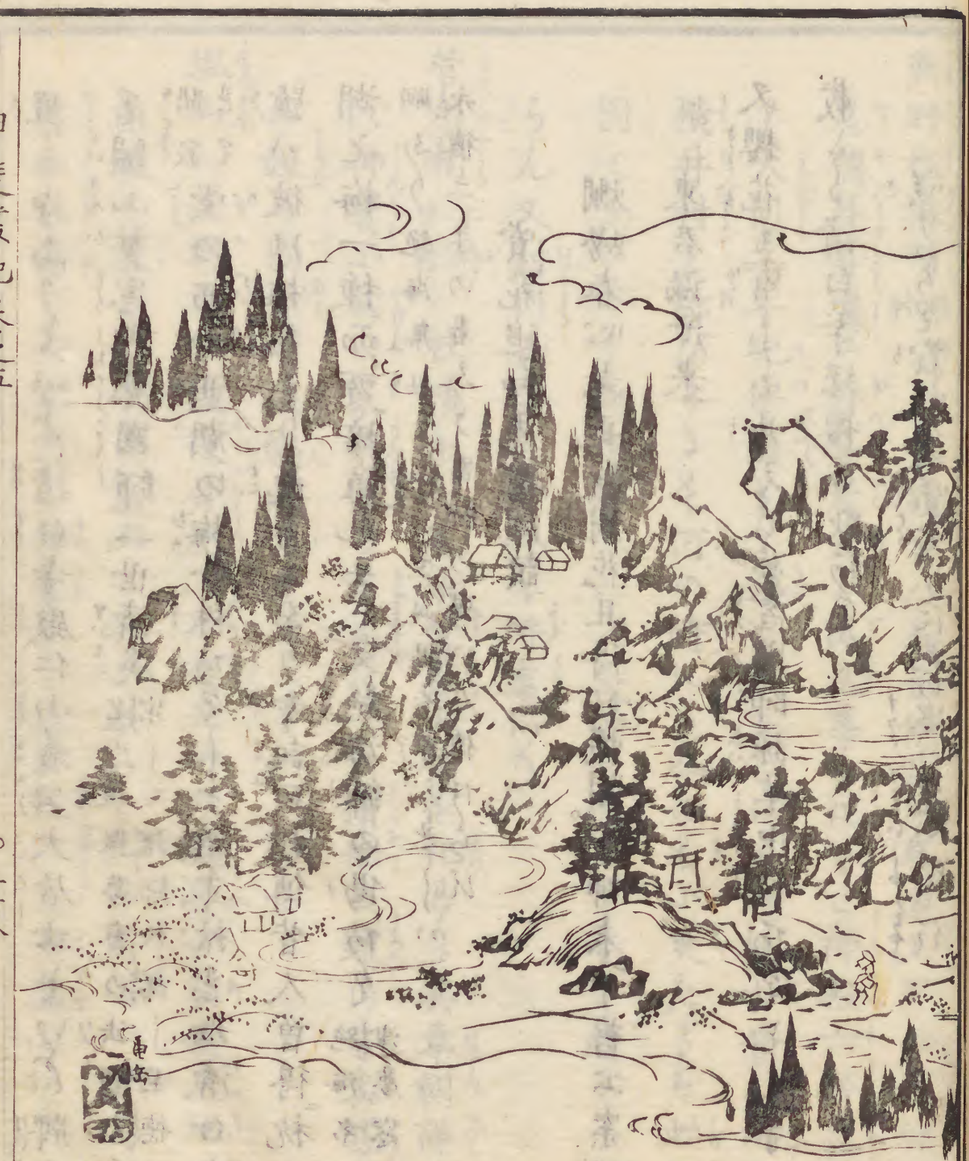
積石出雲造化工。虎蹲龍睡亂松中。人稀　天野蜀山 章

一逕春岑寂。獨有幽蘭不耐風

水光如鏡一潭澄。怪石欹斜勢欲崩。莫道　松井渙齋

小邱人境近。林深風冷翠層々。

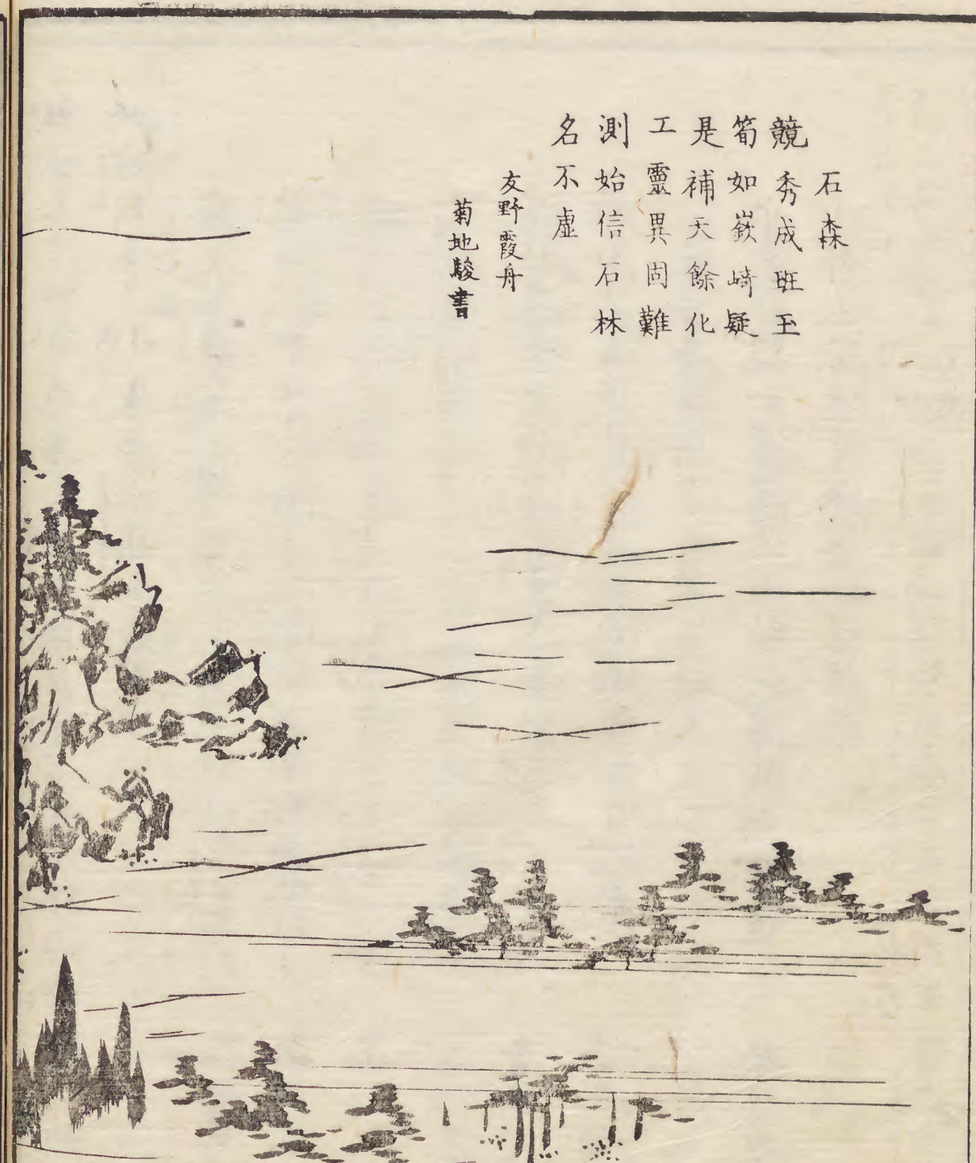
海湧山清白寺 西後屋敷村　臨濟宗妙心寺末足利将軍尊氏公の願



石森

競秀成班玉
筍如嶔崎疑
是補天餘化
工靈異固難
測始信石林
名不虛

友野霞舟
菊地駿書



置し寺ありと云ふ清白寺殿仁山義公大居士といふ牌子あり
又開山梦窓七朝國師二世清溪宗(名ハ通微夢窓の法嗣)して入諸師に謁し到德の年
間寂堂の西小西湖の梅一株あり〻〻近年枯ぬ清白寺の
號ハ彼れ梅花より起るあり寺記曰相傳昔人曾得杭州西
湖之梅一種而呼培殖也云ニ又絶海師の偈あり絶海名ハ中津夢窓の法
嗣なり絶海集世に行ハる此偈を作らるゝハ
永德二年の春なり國師の偈ハ今傳ほらず

賞花追和先國師韻

爛熳春心老更獃。對花且得好懷開。先師未了舊公案。剛被
東君漏泄來

又櫻花も有〻と見えて夢窓國師詠草中にあるとて寺記ふ
載らる清白寺絲櫻の歌あり

咲けばちるあだれハ又咲去ごとに花の姿ハめ兼常住

熊野権現祠熊野村　社領廿八石余伊并冊尊速玉男命事解男命
忍穗耳尊瓊ニ杵尊彦火ニ出見尊を祀りて神殿六所並列せ
り大同二年紀伊國より遷し奉ると云ふ此村古昔ハ御座郷
横井村と称びくるを何の時にか今の名ふ更たるも此祠に
因てふるべし御座郷といふも神の座をしまり起りて名ふ
らん又村内ふ今ふ横井と呼處あり

菅田祠上曾村於　社領十一石余菅原天神を祀る其草創詳ふら
ぬ神寶ふ武田家累代の重寵たりし楯無の鎧あり其縁由并
に鎧の図等ハ後編ふ出せり

塩山　千野。於曾塩後井尻三日市五村の疆界ふ在り此地古昔
鹵塩を産しくるゆゑ山の名とあり山の周囲一里高十町
許松林暢くして其内ふ松草多く産づ乾位ハ小塩山あり又塩

河と呼ぶもなりて千野村より發源でぬ○観國岩　民位ホ

なり天正十一年壬午中

神祖此岩上に登らせ給ひしより名づけ云○温泉　向岳

寺の東の路傍に湧出づ微温なり此山古より本州の名區な

て八雲御抄に載る所の山さゝぐの磯なるべしこれを外の書

にもうれらをみえざるを峡中紀行曰詣塩山是和歌者流所称

為名區者其與海相太遼遠豈芙蓉未役地出時潮夕所激邪將

地産鹵塩或如解池蜀井邪不啻此也州之與信連而反隷海道

者皆疑矣

子規あまた塩山の磯づたひ小舟出でこぐろ　神祇伯顕仲卿

雲隠れ月の入るのうちも四方ふかぬ塩山のこちらもまれ　和泉式部

なれ衣の袂の月もあるかなきかの山さゝぐの磯よりあらぬ　従二位家隆卿

彩雲の乱れ八重にさけば月の出の磯べのあるたゝずまひ　大納言経道卿

とゝ東こそ月もうちなん塩の出ちもの袂ふきもかくらぐ　衣笠大納言

山國の塩出指ものの袂てあるひたる名所ふりそれば

妻のうも今下ケの宮ふれい日彩ぐもの袂を高めるゆ　聖護院道嵐法親王

江戸の旅のふなりなるこゝろ故郷より出でる塩山の松茸をあらべく

あづまぢをもう此塩出ぬ松の下郷　青嶋定賢

指ものの袂をもかあ所こゝ山神代ゆ塩出の出　可雲

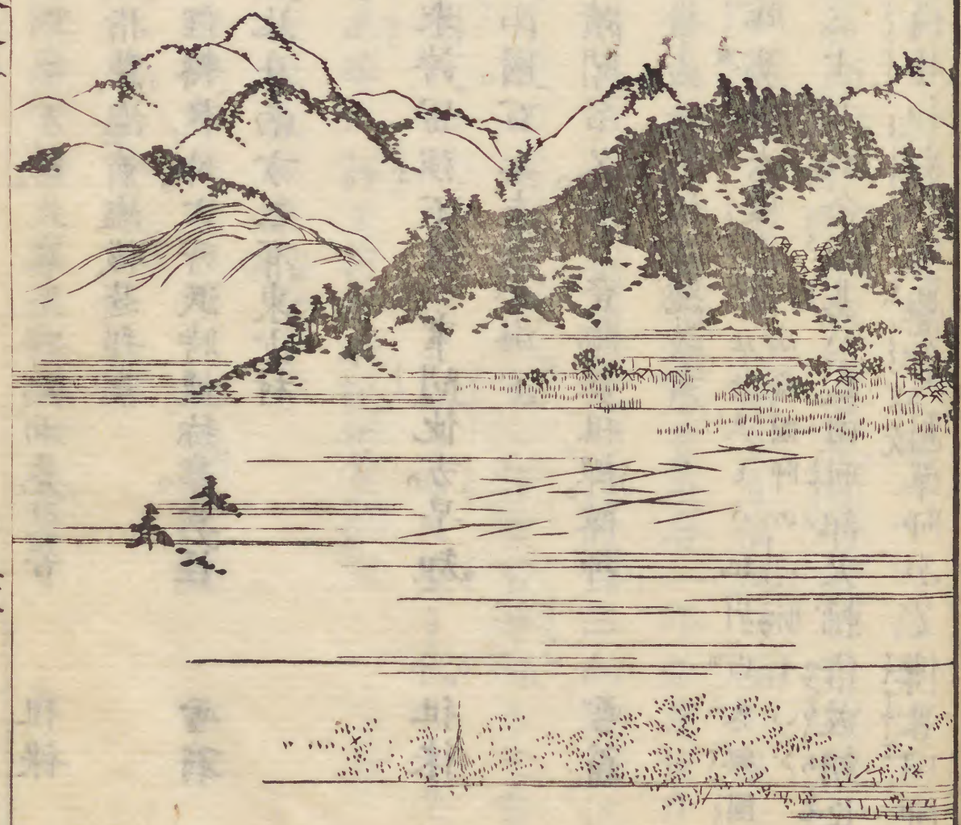
浅草の傳てうもこゝ不のやう　田甫

駿山道西面　甲斐ぎぬ　文昇

辭出南行過東方村詣塩山恵林寺より南へ出て上井尻村の東方を過しなり

甲斐叢記卷之五

宮書陵部文庫



塩山管田両景

国立公文書館
National Archives of Japan

南行忽到東方村。日暮馬蹄烟雨昏。更苦　祖徠
候人煩指點。塩前塩後是邦言
道人言裡轉乾坤。方所泯時便称尊。莫怪　雪翁
向南禮北斗。南方已有東方村

塩山

天府從来誇冨強。不須一事問他方。早知　祖徠
塩嶋在山國。百二未應必海王
塩山勝蹟聞名久。此日登臨探祖禪。禪師　雪翁

塩山向嶽寺　臨濟宗法燈派の法燈派とハ紀州由良興國寺本寺なり寺領三十七石余開基ハ武田刑部太輔信成朝臣にて開山ハ拔隊得勝和尚勅賜惠光大圓禪師なり傳畧曰師諱得勝號拔隊。相州中村縣人。姓藤原氏。歳二十九落髪。往雲州雲樹寺。參于孤峯和尚。号三光國師　永和四年。到甲州。先到高森。今曰竹森村樹庵。三年。有一老宿昌秀。語師曰。南方有福地。曰塩山。移居焉。可矣。於是。請山于大守信成。開地樹庵。實康暦二年正月廿日也。而未著寺號。師前在江州。夢對冨士山。問法。因號曰向嶽庵。住八年。至徳四年二月廿日逝。壽六十一。云。諸堂皆華様。きて當今の黄檗派の規制の如く堂の中も磚を布て疊を代てて寺寶古文書古書畫等ハ詳なる村条小記せり

開山拔隊禪師像在堂後

不是山陰興盡還。西来得二叛禪関。何圖　祖徠
衣拂莫人管。至今尚在影前閒
溪流聲裡透玄關。此事至今聞宇寰。驚看　雪翁

惠光大圓字。峽中便是天王山 傳云師一日聞溪聲大悟

第二祖峻翁像 在開山像東

伯何想看難弟兄。或疑昔日愛寧馨。遺容　　徂徠

猶在一堂上。酷恨大兒肖所生

拔隊開山祖。峻翁称大宗。至今影堂裡。香　　雪翁

火兩尊崇

柱杖 長七尺二寸三分上下両梢皆作貫珠形去上梢四尺處有探水繫棕櫚扇一拂子一

一條柱杖黑嶙峋。驚殺當時多少人。爭奈　　徂徠

枯禪閑道輩。猶眠無事田中春

棕櫚扇 闊七寸二分長一尺柄六寸七分

一枝棕葉扇。振起祖師禪。掛在影堂裡。清　　雪翁

風時冷然

脫毛拂子 柄長八寸五分存

手裡髮二鎮提挈。藪林到處便称尊。麈毛　　徂徠

脫盡莫深訝。猶有舊時把柄存

某侍者 忘其名年二十四五許在開山像西

爭誇獅子窟中兒。返跳機鋒拔一時。得無　　雪翁

昔日高咆哮。深山往有狐狸

明白庵 住持僧呼居

一味風流枯槁禪。爭珍十襲舊青氈。皆言　　徂徠

祖意今猶在。金襴袈裟影像前

野刹蕭條說慧能。携琴載酒未曾饒。古枕　　雪翁

路絶到難得。想見雲栖寺裡僧

塩山向岳寺。拔隊禪師所創。寺藏吳

道子畫觀音像東坡墨竹等。實絶世
異寶也

玉蹊金題免刼塵。鬼呵神護歴千春。吴生　友野霞舟

妙墨坡仙竹。駭絶人間未見珍

玉室祠竹森村　社領二石余祭神ハ天羽明王命ふり鎮座の始ハ詳ならぬ當社を延喜式に載たる玉諸神社ふりといへども同社他にも數多ありぬ孰を以て決めがたし神殿ハ水晶高七尺餘周囲六尺八寸許ありて是を神體と齋ひ奉ふとなへを毎年十一月申酉の日祭祀ありて是を鳥乞の神事と云申の刻ばかりに白鳥必らず飛来て供御を哺ひもて去る土人これを見て翌年の豊凶又物價の貴賤をも占ひ

神垣もかがやくまでの光をそ身のけがれをはらへたれ神の恵も世ふるまでの光のうるぞを添ゆ　仝

玉井里　郷名を記せり

面川　又母川とも作き今ハ重川と作て萩原の奥ある黒川山の鶏冠山より發源て小田原萩原以下十二村の界を流れて坤位小向ひ大野村にて笛吹川に會流して黒川山の艮位ハ下瀝る川を多波川といふ武州に入て多摩川とあり艮位ハ此山の背ふれば其を對へて此方を面川といへるべし

裂石山雲峰寺上萩原村　臨濟宗恵林寺の末寺に記に天平十七年行基菩薩の創られし寺にて本尊十一面觀音ハ井の手づから彫まれしありと云へり此寺府城の鬼門に當るゆゑに古より代々の國主も歸崇まして本州第十六番の札所な

翠石山
高好似月峯
遠比蓬丘石
不減何游越
山靈応禮祝
勝因半齋
紫山芝人録

往昔ハ真言宗ありしが後今の宗ゝ改此山に巨石の両片に裂けるる存ヲ斧を以て鑿たる如し曰て裂石山とは号るゝ寺寶ゝ武田家の旌旗を藏む南無南宮上下法性大明神と書くる旗十六旒諏訪南宮上下大明神とうけう旗一旒天地尤石ゝ梵字六十三字ゆヲ勝頼朝臣の旗として諏訪云ゝ上ゝ同じく梵字のなきもの一旒疾如風徐如林侵掠如火不動如山と書くる旗九旒その他日の丸の干旄一旒花菱章の干旄一旒

圖ハ詳ゝ後ゝ記す

義光朝臣の喉輪機山公の自ら画ゝ不動の像信虎朝臣益ゝ機山公等の印書あどなきあヲ

大菩薩嶺上萩原村

本村の岩間明神を古へ神部神社と称ひくれハ即ち此山を神部山と呼しあり殘簡風土記曰山梨郡東限神部山とゝる是あり然るに中世佛法盛ゝ行なはれ観音菩薩を此祠の本地佛とふして山宮ゝ安置をしまり大菩薩嶺の名起ゝ其ゝ里老の傳へゝ長元三年甲斐守頼信朝臣下總國千葉介平忠常を征し時此路ゝ係ヲ草木繁茂ヲて道を失ひぬ折しゝ樵人の馬を牽来るなりて郷導して嶺上ゝ到ヲしゝが忽然ゝ見えずなりくヲ頼信朝臣遥ゝ西の方を顧ヲは笛吹川の辺ゝ八旒の白旗風ゝ飄ヲて見ゆしとぞ軍神の擁護ゝをゆふ驗しなりんと遥ゝ持ゝて於戲八幡大菩薩と高聲ふ讃賞しまり大菩薩嶺とゝ名づけしあり

とゝいへヲ此嶺山梨都留二郡の界にて下上六里の間絶て涓滴許の水もふく嶮岨きこと又言ばうヲ〇黒川山萩原山大菩薩嶺ゝ接きたる山ふり雲峰寺の傍ゝ上る路行程五里許ヲ殊嶮艱しき路あり此山黄金を産ヲ天

正慶長の頃盛に産しものと見え鶏冠山の神祠ある黄金の鏡の裏面に天正五丁丑年八月念四日と鐫けたり當時於曽熊野に二村に金山衆として金坑戸あり今に傳へて其古文書を蔵てる家あり（後か俗に日蓮年譜文永六年己巳日蓮遊化勝沼北原田波黒川云々攻異曰黒川此地嘗出金家可千大士蓮日往而化後旌霊跡造立精舎號永久山法蓮寺今不出金居民稍減乃移寺於郡赤尾村と見えたり（法蓮寺八本古府中に在て慶長八年四奉行の黒印あり今清運寺これを有て）○鶏冠山　黒川山の接きあり或ハ天骸山とも云府城の艮位ふて鬼門の鎮ありとい実に神さびたる山にて高く蒼天に聳え白雲常に覆へて其巓に神祠存て祭る神い詳ふらず黒川山ある金坑戸の祀て神なりとぞ黄金の鏡の事上ふ以へるごと

雁阪口

山梨郡に属り又秩父街道とも云へり日本武尊本州より東北武蔵上野を歴て西の方碓日嶺に達ひしも此路ふ

ろべ〜又鬼門関と呼ぶ州の艮位に當るゆゑあり中世此路より罪人を放逐たる事もありしかとえて軍鑑ふ増城源八ふ雁阪を越さすると見えたり偖その路條い萩原口の神内川村より北へ分岐て小原七日市場三日市場小屋敷等の諸村を歴て恵林寺の傍にうて笛吹川ふ沿て北に往き藤木上下柚木萩原（支村）川浦の等の数村を歴て川浦村ふ至る此辺の村落を総て川浦入と云雷（一金の響ふ因て名付しなん）湯平温泉を過て天科小抵る（関あり府より凡十里雷湯平是より雁坂嶺を超天科皆川浦の支村ふて）

元國界にて絶頂は武州秩父郡大瀧郷櫛本村関小達るまで
烽火臺址あり
上下八里の間絶て人戸なく其路嶮隘牛馬を通し難し
因小云殘簡風土記小山梨郡北限追田基とあり追田基今
大瀧と作きて秩父郡小属なれ然古時は本州に属しその
ときは雁坂より北小十文字嶺といふあり関を居る信
州佐久口此警衛とひ関守を大村子市と云て大村黨の
ハ村条小委し

加納庄　庄名に記せり

七日子祠　里名に記せり

牧之庄　庄名に記せり

松尾祠小屋敷村　社領十三石余大山咋神若山咋神若年神大巳貴
命素盞烏尊蛭児命合きて六神あらうれを松尾六所明神と
称し相傳へて延喜式に載る松尾神社あるとなり松の
尾郷郷名は乃名も此神社より出たるなり社中に日本武尊の
禊塚といふ塚存て塚上乃櫻樹を禊櫻とい
ふ

幾よろづ代ふかきまで花も咲け実が禊の名乃橘木　作者不知

又社中に二階堂出羽入道道蘊の安置せし金佛あり長一丈
六尺を乃側に禁榜を掲ぐ

武田兵庫助宅地址同村　小屋敷或は於屋敷と作り村の名は
此宅地より出たるなり兵庫助は機山公乃弟にて名は信實
なりひき又河窪氏とも称ひしあり此處に堡を構へて武州
秩父口雁阪路の警固をせられたるなり恵林寺に石碑あり
法諡を輪禪寺殿玉麟一機大居士と鐫つけり

乾徳山恵林寺　三日市御屋敷藤木三村の界に在て臨濟宗関

顯齋忱

惠林寺
地靈雲石怪
山靜暮鐘長
泠然林間霧
如何來往忙
天野栗
文庵馨書

山派妙心寺の末寺と領五十九石余此邉を當時二階堂入道
道蘊乃封邑あり　出羽守藤原貞藤元應二年髮を薙て出羽
道蘊居士と名　入道と名の　當寺の位牌に真空院麗林
元德二年入道當寺と揔置て夢窓國師を請招て開
山乃祖とす是より以前に國師德和の乾德山に入て一夏
面壁をなすを因て乾德と以て山號とす云堂閣殊宏麗
なり寺記に永祿七年機山公寺領三百貫余を寄て壽藏所と
定給ひし古規関山派に改て　國師より三十一世の　快川紹嘉
と請を住持とす勅にて大通智勝國師と山號を賜ふ
こゝ妙心寺に隷ぬ機山公殊に禪道を崇敬ら給ふ
其道に名ある僧ども來會へるもの多し中にも快川春國
等を以て師家と憑ふ云ふ　以上寺記　天正壬午に江州の佐々木
義禎或は義禎の子二郎義弼　及び室町家の士大和淡路守上福院等

本州に浪遊在しを織田右府義禎に憎まれてこれを捕へ
んとせしかば三人のその奔て當寺に匿る右府兵を遣して
搜索しむるに寺の人衆皆山門の上に保ミ居るを織田の兵
ども攻入て火を懸るれば快川并に大綱睦庵高山長禪寺の住僧藍
田東光寺の住僧五人の東堂を始め皆機山公の敬ひし老宿僧侶九七十余人
悉く燒亡て殿堂寺寶一つとして殘るもの無し　傳いへ快川の燒ち大火
の裡に坐して唱て曰安禪不必須山水滅却心頭火自涼按ずに此二句は黄龍新禪師の語也快川境に遇てこれを誦し
ふらん快川火定の偈　其後　大駕巡行在まし　時快川の會
とものは誤なり
下の末宗と称る僧山門の焚ぜし時火の中を躍出て恙ふこ
なし故出て拜謁奉るしかば寺領を賜ひ興復の事を命きら
ばかりて今の寺は建立しかん古時の礎石ありとて存
ぜるを見るに其最宏大うして形狀想ひやらるる傍らに大杉

一株ありて彼の兵燹の時ぬ遺骨を埋めて其上ゝ植ゝゝそこれを藪杉と呼ゝ

至恵林寺。顯視山門。上有鐘。僧快川

入定大火聚處

従容衣鉢上樓時。樓下風興捲燄吹。欲識　徂徠

樓頭涼似水。我今猶拝快川師

烈風烈焰接天田。飛殿湧臺盡作灰。要識　雪翁

國師無礙處。須登樓上一瞻来

○機山公祠　客殿の西にあり　元亀四年武田晴信公卒を給ひて

此ゝ葬るぬ導師ハ快川國師ふゝ法諡ゝて恵林寺殿機山信

玄大居士をいゝ曩ゝ公雜髪の時長禪寺此祠ゝ置ゝゝ公の

像ハ軍鑑にも記をる如く公の世ゝ在ゝ時洛ゝり佛匠弘清

を召ゝて對面つゝ此像を彫刻ましむ其容貌不動明王に肖

たりを以て更ゝ螺髪結跏鈔索ゝどを彫添へ其頭髪を焼て

黒く著色ゝれば宛然忿怒ゝる明王ゝり唯肉ゝ肥たりと骨

臂に長毫ありゝ處不動ゝ殊ふりのみ是を武田不動尊と号つ

く壬午の兵燹にも本尊釈迦ゝ像と共ゝ免を得たりゝそ寶

永二年百三十三回の忌辰ゝ當てゝ折柄松平吉保朝臣の本

州を賜りゝに由て詠れゝ歌ありゝ

百ゝまり三十三ゝの巻ゝ心ゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

悉道機山肖不動。誰知不動似機山。英雄　徂徠

千古玩人處。鐵甲十重忿怒顔

何問更誇戦伐功。今瞻不動装尊容。大雄　雪翁

殿化刼灰後。宛在迦樓羅焔中

謁機山公祠　　大窪詩佛

豈啻威名重。可知風教敦。三章猶舊法。四塞自雄藩。城破關門在。人亡金幣存。至今祠宇下。不敢廢蘋蘩

仝前次韻　　大森欽

自出王孫重。仁風數世敦。山河元大鎮。割據更雄藩。雖嘆金城破。尚欣玉廟存。永安終陳迹。万古此蘋蘩

○千代櫻　寺域小在り大五圍余高十五六丈夢窓國師の手植にて今に有り○假山　客殿の北小在り夢窓國師これを築うれしと云傳ふ懸泉有り奇しき岩ども折疊りて幽邃き風致有り享保中松平甲斐守吉里朝臣これを增築せられし

又寺域十境ありて両袖櫻　横月梅　恵山水　笛川流　心池月　臥龍松　士嶺雪　両班榻　松間反橋　林杪浮圖等ありて軍鑑に有るとき八部の神の如く上求る心動へ法華の二月求るこそ大通智勝國師の使僧と立南袖の橋のうくふてひ花のやる一所の山もくへ法華立寄いへうくふり信玄公ゆ一首名残の桜ふ一首名残の桜ふ

○心字池　筋室又觀室乃前に在り是も國師の造られしあり心字の象今い埋没して仝うらび寺後の機山公及び保山公の石碑その他武田信實萩原常陸同豊前大村伊賀尾畑景憲ふどの石碑立ふびたりその他殿閣寺寶古文書畫等ふ村

機山公惠林寺觀花圖

国立公文書館
National Archives of Japan

条に譲りて此まを贅江峽中紀行曰。僧云機山影。原在小松下。
世後七年。始徙此。壬午之亂。兵燹燼殿閣。它佛像什物。皆所掠盡。
唯此與所奉釋迦文拈華像。僧赤宗者負竭 神祖。寺亟復舊觀。
又覽牧溪畫羅漢。唯存二幀。則第九第十尊者也。快川題其背。
墨瀋如新。可翁畫海島大士像。亦佳筆也。又云更入山十二三里。
有淨居寺。奉天王像。機山伐駿時。夢藉其力。高大夫軍鑑。謂之上
求寺不動尊者。訛傳也。

夕花

あくるあさのゆふかぜに花のにほひをとふ　機山公

恵林晩鐘　享保中勅許八景

ほのぼのとあけぬるかねのこゑのうちにいくらぞ　外山前中納言光顕卿

入あひのかねのこゑのうちにいくらぞ　河内公明

後刃はぬぎ名ちの二月の空　依田喬長

妹のうれ快川ぬ師ゆめの記　蝶夢

賀恵林新寺呈夢窓和尚　東帰集

揮戈佛日田三舎。大用現前雷發音。揷草
識如契符合。布金設幻寶珠森。展降龍盞
搏香積。開選佛場投芥針。啓廸人天無茅
二。慧林名甲去来今

甲州恵林適值祖忌作偈呈夢窓和尚

破了六宗摧異見。放開五葉一花春。祖翁
隻履今何處。借問當時得髓人

天岸相訪甲之恵林有偈次韻為謝　語録

凌空金錫枉降臨。数日清談味徳音。鏟彩

佛乗禪師　名恵　廣字天岸武州人與明極竺山同入元元徳元年帰朝

全

夢窓國師

殿堂成莊麗。蓄幽林樾轉陰森。淡交喜得
懷無碜。浮世從他鍾有針。盛事定應傳永
劫。山門不翅幸于今。春屋妙葩呼著夢窓年譜曰元徳二年庚午師領瑞峯居二年百廢具舉云〻秋九月潛逃歸瑞泉衆追至師閉門避之作偈示衆云聚散因緣皆有自秋雲出岫不應遮道人胸次無胡越地北天南共一家次日侵早出鎌倉往甲州牧庄創惠林寺居焉雖為小庵持規挈矩若臨萬衆云〻先是師在平塩寺龍山庵淨居寺云

送元首座往惠林

天宮夢裡不停機。出格風流惟自知。古錫
凌空霜露冷。惠林巢鼓在斯時　佛乘禪師

送哲首座往惠林

世迫澆漓歲月深。祖門日廢莫由禁。良哉
宗匠不懷手。鉞斧高提入惠林　仝

送昭首座住甲之惠林

化門隆替有曰緣。一髮千斤要保全。法雨
毋慳澍邉鄙。惠林榮茂蔭人天　仝

惠林山居十首　節二

黒甜夢破午陰還。古柏煙消對愽山。三十
年前塵累事。一時休罷付幽閑　夢窓國師

青山幾處變黄山。浮世紛〻揔不干。眼裡
有塵三界窄。心頭無事一床寛　仝

惠林仁岫和尚十七年忌日

并吞四海定龍蛇。崇福中興老作家。猶為
子孫餘毒氣。荷花吐出鐵梅花　智勝國師　快川

古寺看花

紺藍無處不深紅。花下吟遊勝會中。身上　機山公
從教詩破戒。樂称終日醉春風

心字池

寒池半畝費修開。似少源頭活水来。貪看　徂徠
檻前風月好。坐教心字半湮埋

心字池頭問老禪。々〻心匠絶中邊。莫將　雪翁
點畫論心字。月影風痕已歴然

惠林寺園池。夢窓國師所營築。有

夢窓貞女二瀑

浄刹無塵歳月深。巍然臺殿冠叢林。高僧　友野霞舟
手鑿嵓間水。不盡飛流直至今

高槁山放光寺（藤木村）

或ハ法光寺ト作ル新義真言宗城州醍醐報恩院末寺寺領十七石余傳ヘ云當寺ハ賀賢僧都の開山にて古昔黒川山なる高槁村ニ在リしを壽永三年安田遠江守義定此地ニ遷シ曰て高槁を以て山号とそと云へ又鎌倉大草紙に梶原ガ讒言して安田謀叛のよしを上る頼朝大ニ怒て梶原と加藤二人を討ふ下きる義定ハ法光寺ニて自害しぬ中略義定の亡魂ほうりれそバ恐をそれ法光ちなる多門天王を造て其亡骨を中ニ納て法光禪定門とて今もあり云々と見えたり

龍山庵（下柚木村）　天龍山棲雲寺の後の山ニ在て夢窓國師の庵址ふりとゝ〻明の宋濂ガ國師の碑銘ニも師田栖甲州の龍山庵とゝ〻夢窓詠草ニ甲州河浦と所に山ごもりておそしゝ〻る庵は雪むゝ潰て人は踏ゝふ跡ゝ

一ヶ金
芽山素圓

溪皆奔流隨地吼
巖高瀑布自天垂
山靈日：獻奇景
經過一奇還一奇
米庵河三亥

今其を世俗にて此端書ハ編者の言葉へ
象尾を同名ハ那に去の基て定ふ跡ある雪のひゝえ
又風雅集ま

いくたびか伝まて出つらん定ふき世ふ猪ふかり尾　夢窓國師

七屋敷村　武田家ま時の雨宮原、岡部、花輪、曽根、杣野氏等の宅
址と云傳る處ハ今ま税地とあ雁坂口警衛の士等ふ
ハ居し

一ノ釜　笛吹川の源流ま東崖ま川浦西崖ハ上釜口ま屬て
絶壁突岩澗中ま逼て急流落かゝて飛瀑とあ高き
二十丈ま近うはへ廣さ五尋ばかり其音岩木ま震ひ踏足
も落つき難く見ハ目も眩めきて恐ろしさえも言ればて下
ま深淵ハ澗さ十尋ま過るべし水烟立昇て其上常
ま虹をうる實ま國内の大瀑布あり土人是を釜と以へて
二ノ釜　東崖ハ上荻原川浦の西崖ま下釜口に屬て釜のこ
とハ竜郷の条ふ委しく記せり併そうる色し

踏かとふうへて宝し人の新　雷石
あり筋ま　れむちゝやゝぎに　岱年

川浦瀑布

羊腸逈澗白雲邊。忽訝震雷咫尺天。試俯　萩原静齊
巉嵓奇絶處。飛流散雨暗深淵

笛吹川　奥仙丈山（本州の北極）の東麓ある西沢ま發源て此川子
位に発て酉位に向かゝに又子酉川と名づ地名筌
曰。笛水起子終酉。九曲田十位。濫觴曰河浦。云く按に九曲とい
始め子に起て卯に向ひ一曲して辰に向ひ又曲て酉ま向

ひ下釜口村より坤に向ひ差出磯より至る午より向ひ國府より
石和、白井郷、黒等各處より曲りて多くは坤の流を大田和村
の大曲と云處より酉位の向ひ今福新田の至りて釜無川
芦川と落會へり故に九曲にして十位を回るより又笛譜に
操音の訓通じたるを以て笛吹川と轉称せるなり名勝
志に権三郎と云もの笛を吹て溺死せしより笛吹川の名起
るなれども小松村長慶寺なる権三郎塚の記に天正
五年七月廿日溺死すと有て笛吹の名は夫より前なりと
しに信ひがたし

山おろし雪の白波吹きて笛吹の川　夢窓國師

そなの乃ふ笛吹川と云る川佐つるよりて泳ぎ
去風小岩なる井もおとしへの笛吹川の波のちくべふ　聖護院道興法親王

累る代に笛吹川の寄せくれ雪の波やたちらん　作者不知

人のひまのそふむけふ

浪のもとも秋のふくべふの笛吹川の水の紅風　加茂季鷹

笛吹の川をへ板まもびきもの岸のもる風　仮田喬長

経萬力渡笛水。一名子酉川

孤人幾把笛吹疑。昔日誰家横笛吹。江上

数峰今尚碧。遥思一曲欲終時　徂徠

誰歌白雪世間傳。細浪作花満笛川。何耐

月明江上過。已看煙雨慘秋天　雪翁

○

又萩原路なる笛吹川の西別田村より分岐りて落合万力の二
村を歴て伊佐称乃里又根滝森とも云波埼山を過ぎ兄川弟
里名は記せり

国立公文書館
National Archives of Japan

川を超え自尓笛吹川ゟ沿ひて南八幡、北八幡、岩手、隼等の諸村を過ぎ西保川を渡り城古寺、室伏、成沢、三村を径て萩原ゟ徳和川の第二橋を渡り第三橋ゟ笛吹川を超して上萩原村ゟ至る神内川村より来る路ゟ會ふ雁阪口の間道あり八幡より北の諸村川東と同じく川浦入と呼ぶ第一橋下萩原より上柚木へ架け第二の橋ハ下萩原と下釜口との分界なる徳和川ゟ架け第三の橋ハ下釜口より上萩原へ架けり雁坂道の険阻を避て第一橋より河西へ遷り第三橋ゟ又河東へ転る故ゟ其他赤屋橋、上釜口、鍛冶屋橋、隼橋、岩手橋等ふり兄川八幡八村入會の山中寛化明神の池より發源し多羅賀嶺ゟ下り転田て東ゟ流れ指出磯ゟ笛吹川ゟ會へり弟川或ハ窪川ゟ云市川村の北大平山の諸磎の水及市川渠ゟ注ち會して東南に流れ出て北八幡の疆に係て指出磯にて兄川と合へり故ゟ弟川と称ふらん

八幡祠北八幡村　社領二百七十石余祭神三座譽田別命應神天皇足仲彦命仲哀天皇氣長足姫尊神功皇后なり古傳ゟ貞観元年己卯二月廿三日木工頭従五位上和氣朝臣彝範ゟ勅して豊前國宇佐宮ゟ遷し奉り始めて笛吹川の中嶋大井俣の地ゟ鎮座ありし故ゟ延喜式ゟ大井俣神社と記されたり後今の窪の地ゟ遷り座しゟ窪八幡祠と称へり村の名も此祠ゟ出にて武田氏世々崇敬ゟ造営壮麗き大社なり八月十五日笛吹川原に神幸ありて放生會の神事ありて明日より神事訖るまで卿中の産子諸の不浄を禁る事甚厳にて死体をも埋めず産湯をも棄ずとふん社内ゟ影向櫻と云る老木ありそ又八本杉とて神殿の後ゟあり新羅三郎ゟ植らるゝ云ゟ其内の一株ハ枯たり

西保川　或ハ武河と称す西保の奥仙丈山より發源して南へ流れて牧平より係て赤柴川へ會ひて東へ流れ笛吹川へ注つ牧平村ハ竹川監物の宅蹟あり又武川牧の事ハ牧の条へ言へ併せ考へべし

浄居寺城堀城古寺村　或ハ常光と名けて初め此地ハ常牧山浄居寺と云夢窓國師創置らゆ寺なり夢窓年譜曰。嘉元三年乙巳。歸甲斐省親。牧庄主堅請權輿浄居蘭若。居之。云々又宋濂が國師碑銘曰。師有省。辭歸隱常牧山（按ハ此地牧庄ハ屬き二階堂出羽入道道蘊ノ采地ニ）年譜ハ主堅請とあるハ主ニ然るハ元徳中二階堂氏を斥て云へるならん

寺を剏置て國師を招きて住持とす其後浄古寺をハ他へ遷し此ハ居館を修營しや寺を今接近の窪平村へ存（按城古寺村の西ハ接きたる倉科村ハ上求寺の廢址と云傳へ）處存す寺址四千五百坪の見捨地なり男滝女滝と云なり其

辺ハ礎石遺す天正壬午の兵燹ハ伽藍尽く焼亡して後僅の堂のみを營作て不動の像を置り戰艦に恵林寺のむく上求寺の不動へ御まいとなりてれありと云城古浄居上求常光とも音の近きをもて記したるものなりさ此を今の浄古寺ハ兵火の後再ひ窪平へハ天正中遷りしなるべし猶のちの考を俟つ

神祖又此處に城を築うせらるゝ家忠日記天正十七年八月京都大佛殿造營料冨士山より巨材を引出す

神祖上覽のため大宮へ出御あらんとて甲州へ入らせらる中暑九月東郡に甲信の人夫をいそぎ城を築くこれを鑒臨あり内藤烈祖成績ハ天正十八年先是内藤信成守甲州常光寺三左衛門信成ハ守衛を命せらる

城至此率兵而来とあるハ即ちこの城堀なるべし又保科系圖ハ彈正正直浄古寺の城御普請奉行とあり編年集成ハ内藤家傳を引て信成ハ采邑を加へ馬上五十騎附屬して常光寺の城主たらしむ抑なるハ東郡の城といへるハこの処なるべ

弥明らあめ

徳和川　徳和山乾徳山その他の山嶽の瀝ども會注して二里餘を歴て徳和村より抵て乾位より巽位に向ひ一里餘を流れて下釜口と下萩原との間より笛吹河に入るあり第二の槁のる上はいへて

乾徳山　徳和　釜口村より西に當て本村より二里余この山甚高し松檜欝茂もり昔時夢窓國師一夏面壁をし地して後に恵林寺を創めし時此山寺の乾位に當る故乾徳山と名け即て其名をもて寺の山号となすと云て山中に座禪石硯石枕石盥石扇平休息石等ありて徳和川この山より麓にて出つ夢窓國師詠草に甲あり云ふきこのあよ伝ひるに此端書ハ編者の言葉と

ふるれて八那をとくも出る山河ふ世をいと身の新いらさと

此處にその歌ありといへり

宮内庁書陵部

甲斐叢記巻之五　終

甲斐叢記巻之五

甲斐叢記後輯

諸名家筆挿画入

五冊嗣出

此編ハ前編を承接で穂坂路に始て古府乃邉より御岳金峯まで乃勝槩を委〳〵く記し次に逸見路茅ヶ岳八ヶ岳の靈秀花水坂乃絶景を寫し大門嶺口棒道等を詳らかに次て甲州道中信濃路甲府乃西口より始て韮崎新府等乃古跡白峯駒ヶ岳の諸山及び昔し徂徠先生乃訪れし柳沢餓鬼嗌乃古路まてを記し教来石駅に終る次に江戸道甲府乃東口より始て柏尾大善寺田野景徳院天目山等の古跡猿橋の奇絶岩殿の城址等を委〳〵上野原駅に終る因に谷村通て冨士登山道をも記し是にて道路乃部終る末の一巻を武田家の累系累代乃花押信虎朝臣以下三代の肖像機山公の詩歌及び諸の古器古書文書等を乃セ尾に甲金の圖を出して附録とふす此巻を殊更古へを考る地資とも為す者也凡四郡の山川寺社名所古跡前後二編を合て漏所なく舉記しあるべ看官全部を通覧して其形勝を知るべし

嘉永二年己酉三月起業

同四年辛亥十二月刻成

邨嘉平刻

東町四丁目 村田屋孝太郎

八日町壹丁目 藤屋傳右衛門梓

三都發

京都　出雲寺文次郎
　　勝村治右衛門
　　河内屋喜兵衛

大坂　河内屋茂兵衛
　　秋田屋太右衛門
　　須原屋茂兵衛
　　須原屋伊八
　　小林新兵衛

東京　森屋治兵衛
　　丁子屋平兵衛
　　和泉屋市兵衛
　　岡田屋嘉七
　　和泉屋金右衛門
　　山城屋佐兵衛

弘書林

国立公文書館
National Archives of Japan